放送大学　会津学知会　ミニ講演会　　2020年11月8日（火）

於 會津稽古堂　3階研修室　和室

あらためて学び知る　会津が生んだ世界の医学者

野口英世の生涯と業績

～新型コロナに揺れる現代で学ぶべきこと～

野口英世記念館　学芸員　森田鉄平

§はじめに

古関裕而作曲・土井晩翠作詞「野口英世」

新型コロナウイルス・感染症研究＝目に見えない敵との闘い

野口英世の生涯、その魅力とともに、英世を支えた人々に焦点をあててご紹介します。

§１、野口英世の生涯

１、猪苗代時代

1876（明治9）年11月9日　生誕　　野口家にとって待望の男の子の誕生

1878（明治11）年4月末　1歳半　運命の火傷　左手が不自由となる

母シカの悔い　勉学で身を立たせるために自らは寝る間を惜しんで働く

積雪時、会津若松まで峠を越える荷運びの仕事

1883（明治16）年　6歳　三ツ和小学校入学

左手のやけどはコンプレックス　友達にからかわれる　生活での不自由

母の励まし　→　清作「勉強して見返してやる！」　←　母の懸命な姿

1889（明治22）年　12歳　猪苗代高等小学校入学

貧しい農家の子どもが進学することはほとんどない

→**小林栄**との出会い　生涯の師

教師と生徒以上の関係　後に英世は小林栄・夫人シュンを父母と仰ぐ

1892（明治25）年　若松・会陽医院で左手の指を開く手術を行う

→外科医・**渡部鼎**との出会い

２、若松時代

1893（明治26）年　16歳　会陽医院に薬局生として入門

→医学の勉強とともに　語学の勉強にも力を入れる

会津中学校・教会など常に勉学の機会を探していく

語学力はその後世界で活躍する英世の大きな武器となる

1896（明治29）年　歯科診療で訪れていた**血脇守之助**との出会い

３、東京時代

1896（明治 29）年　19 歳で上京
1897（明治 30）年　医術開業試験に合格
　高山歯科医学院、順天堂医院、伝染病研究所に就職
　→学歴・学閥の壁＝思うような研究が出来ない
1899（明治 32）年　横浜開港検疫所検疫医官補となる
　→ペスト患者発見の功績により国際予防委員会で中国へ
1900（明治 33）年　24 歳　新たなチャンスをつかむため単身渡米

４、アメリカ時代

フレキスナー博士の研究室に入る　蛇毒の研究
1903（明治 36）年　26 歳　デンマーク留学
1904（明治 37）年　27 歳　ロックフェラー医学研究所に入所
　→渡米わずか 3 年半で最高の研究環境を手に入れる
1914（大正 3）年　38 歳　ノーベル賞の候補に挙がる
　→梅毒スピロヘータの研究成果が評価される
1915（大正 4）年　39 歳　15 年ぶりの帰国を果たす

５、中南米・アフリカ時代

再渡米の英世をまっていたのは＜黄熱病＞
1918（大正 7）年　42 歳　中南米への遠征
　→「黄熱病病原体を発見」と発表
　　野口ワクチンを生成し、中南米で多くの人命を救う
　　→しかし、学界で英世の研究が疑問視される
1927（昭和 2）年　黄熱病研究のためアフリカ遠征
1928（昭和 3）年　51 歳　西アフリカで黄熱病のため逝去

野口英世の成功とは

野口英世の成功は、けして一人の力だけでは成し得なかった
家族・恩師・知人の助けに対して感謝の気持ちを持ち続けた
「研究で成果をあげることが何よりの恩返し」

§２　母の背中を見て育った野口英世　～　最愛の母　野口シカ（1853-1918）

１、シカの境遇

貧しい農家に生まれ、祖母との二人暮らし
心のよりどころは観音様
野口家の再興が少女シカの悲願　＝自分で家を修繕する

２、運命の火傷

1878年４月　シカ24才、清作（後の英世）１歳半
松の瘤のようになった左手
身を粉にして働くシカ
清作を学問の道へ

３、英世にまけてらんに

英世の成長を見届け自分は産婆の資格を取る
30年間で2000人あまりの子どもを取り上げる
法名「貞賢院産恵精安清大姉」

４、母からの手紙

「はやくきてくたされ　はやくきてくたされ」
子どものころに覚えた文字＝お盆の灰で手習い

５、英世15年ぶりの帰国

1915（大正４）年　孝行のための帰国
中田観音への参拝、関西旅行
「まるでおとぎのお国にいるようだ」

６、最愛の母の死

1918年11月10日　スペイン風邪によりシカ逝去
「只管慈母の教訓及び遺志を守りて
　　出来る丈この世のために盡すことを誓い候」

§3　生涯の恩師との出会い　～　父と慕った小林 栄（1860-1940）

１、教育者・小林 栄

会津藩士の子として生まれる
会津藩校日新館への憧れ
猪苗代小学校に就職するも福島師範学校へ
県都福島ではなく、両親のいる猪苗代のために

２、野口英世との出会い

三ツ和小学校卒業試験
高等小学校への進学を勧める＝経済的な支援も
小林栄の科学的資質は英世に受け継がれる

３、野口英世の「父」

渡米に際し英世の不安＝猪苗代に残す家族の事
小林栄・シュン夫妻が家族の面倒を見る＝親子の契り
英世の手紙に書かれる「父・母」＝「小林栄・シュン」
200 通を超える小林栄宛の手紙

４、私立猪苗代日新館

地域の青年教育に尽力
小林栄の実学主義　「第１に人間、第２に健康、第３に学問」
英世もアメリカから物的支援

５、野口英世の顕彰

英世の死後、小林栄が関連資料収集を呼びかける
アメリカより 10 箱をこえる資料が送られる
野口英世記念会の礎
野口英世記念館の開館を見届け翌昭和 15 年逝去

§4　左手の手術　～　会陽医院院長　渡部 鼎　（1858-1932）

1、外科医・渡部 鼎

河沼郡野沢村（現西会津町）出身
父は研幾堂医院　渡部思斎　多くの民権家を輩出
軍医として西南戦争に従軍　軍医として大阪・東京で活躍
1886（明治 19）年カリフォルニア大学医学部に留学
ドクトルの資格を得てサンフランシスコに開業

2、清作の左手を手術

1890（明治 23）年 6 月　若松市大町に会陽医院を開業
1892（明治 25）年 10 月　左手の開指手術
　→清作は医術のすばらしさを知る。

3、会陽医院

会陽医院の薬局生となる　清作若松での生活
医術開業試験に向けて猛勉強する清作を支援
顕微鏡との出会い
鼎の日清戦争出征の際に会計庶務を清作に任せる

4、野口英世の渡米

英世はなぜアメリカを選んだか？
野口英世の英語力

5、野口英世の帰国

野口英世　勲四等旭日小綬章　を受ける
渡部鼎が銀座より大阪へ電報を送る
「キミ　アス　クン四トウタマワル　ワタナベ」
取材に対し「叙勲は本人は勿論　誠に医界のために喜ばしい事である」
（大阪毎日　大正 4 年 10 月 9 日付）

会津学知会　ミニ講演会

会津稽古堂 3F 和室研修室